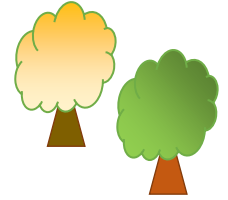


いのちの大切さを考える本（中学生～高校生向け）



「みとめあうってすてきだね」



～生きるということ～

人は、「今」を懸命に生きています。
生まれたその時代を生きていくことの喜び、苦しみ、尊さを実感できる本を選びました。
市内5つの図書館で借りられます。

東村山市立図書館

『14歳、明日の時間割』

鈴木るりか／著 小学館

茜は体育が超苦手な中学生女子。毎年行われるマラソン大会では、歩いてやっとゴールにたどり着くほどだ。でも今年は、自宅療養中のおじいちゃんが少しでも長く生きられることを願って、最後まで走りぬこうと決意する。「どんな姿になっても、命の砂時計の最後のひと粒が落ちきる瞬間までは生きているんだよ」おじいちゃんの言葉が胸にしみる。

今話題の中学生作家、待望の2作目。イラストは漫画『大家さんと僕』の作者、矢部太郎さん。

『学校に行きたくない君へ』

大先輩たちが語る生き方のヒント。』
全国不登校新聞社／編 ポプラ社

不登校の当事者や経験者が作成に携わっている「不登校新聞」で人気のインタビュー記事をまとめた1冊。語るのは女優の樹木希林、将棋の羽生善治ら人生の大先輩たち。「難があってもこそ育つ」「いつ始めても、いつやめてもいい」など、目次を読むだけでも癒されて元気が出てきそう。

『生きる』 谷川俊太郎／詩 岡本よしろう／絵 福音館書店

生きているということ いま生きているということ 泣けるということ 笑えるということ…谷川俊太郎の詩に、日常のさまざまな場面を描いた絵がひびく。誰もが「今」を生きている。

『ヒトラーと暮らした少年』

ジョン・ポイン／著 原田勝／訳
あすなる書房

第2次世界大戦前に、フランスで生まれた少年ピエロは、7歳で両親を亡くし、ドイツにいる叔母のもとに引き取られる。叔母はヒトラーの別荘で住み込みの家政婦をしていた。時々滞在するヒトラーの影響を受けて、優しかったピエロが高圧的になり、徐々に「迫害する側」へと変貌していく。

同作家のユダヤ人大量虐殺にふれた『縞模様のパジャマの少年』（千葉茂樹／訳 岩波書店）もあわせて読んでほしい。

『水曜日の凱歌』

乃南アサ／著 新潮社

昭和20年8月15日、日本の敗戦で14歳の鈴子の生活は大きく変わっていく。戦争中、7人家族はどんどん欠けて、残ったのはお母さまだけ。お父さまの親友を頼って何とか暮らしていたけれど、そんな中、お母さまがある仕事をすすめられる。得意の英語を活かして、進駐軍と、進駐軍をもてなす女性たちとの間を取り持つ通訳をしてほしいと言うのだ。

おとなしかったお母さまの変化に戸惑う鈴子。そして鈴子も変わっていく・・・。

戦争によってこわされたもの、再生されたものを描く物語。